

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-753-3013 (直通)

狭くて危険な書庫

池田 千恵

京都大学文学部図書室

京都大学文学部では本年(1990)重量オーバーで危険を指摘されたため約34000冊を学部外に出した。その内27000冊が梱包状態である。書庫問題が緊急で大きな問題になってきた経過をみていきたい。

明治39(1906)年京都帝国大学文科大学として文学部は開設され、同時に図書は附属図書館に集中せず、学部、研究室に分散配置された。大正3年史学科陳列館が完工され、その西側に書庫が設けられ、閲覧室も設備された。現在使用されている閲覧室・書庫は大正12年、14年、昭和40年に新設されたものである。文学部の書庫は哲学、史学、文学と3ヶ所に大きく分かれ、その他心理、考古、羽田記念館などの書庫もある。数量的には昭和31年(1956)年で約37万冊だった図書は約12000冊の雑誌を附属図書館に移しても70万冊所蔵しており、規模は附属図書館並である。

文学部の図書は1年に約1万冊増加してきた。特に10年前から、書庫がいっぱいになり、不都合になってきた。1万冊の図書は約書架50本分必要となっている。機械的に考えても各書庫に1年に書庫15本分のスペースがいることになる。このため職員は窓をふさいだ所や、作りつけ書庫の脇などに書架を購入して新着図書をつめこんできた。特に文学科の書庫はスペースがなく、2講座分と3文庫を他書庫に移した。しかし昨年になると、新しい書架を設置する場所もなくなってきた。また床のひび割れも目立つし、築後70年近く経つため、一番スペースで苦勞してきた文学科書庫の安全性確認を「財団法人建築研究会」に依頼した。結論として「いつ何が起こってもおかしくない状態だから重量をまず半分にすること」という回答をもらった。職員は「やっぱりか」

と改めて床のひび割れをながめると共に、毎日の入庫が不安になった。図書職員会議で、「まずは書庫の重量を半分にするため、特殊文庫を附属図書館に預かってもらってはどうか。そのためには、1ヶ月間閲覧業務停止も己むを得ず」と話合った。文学科の図書の半分という約11万冊になる。また特殊文庫移動について教授会でも議題にしてもらい、研究室にも検討してもらった。その結果一部は利用できる教養部へ、他は梱包して附属図書館へ移動することになった。また中文雑誌も一部附属図書館へ移し、全部で34000冊を学部外にだした。梱包することに関しては重複の分を主に出したが、文学部しかないという図書もあり、作業するものは複雑な気持がした。こういう経過で現在27文庫の内5文庫が梱包、4文庫一部梱包、3文庫が他部局、2文庫は研究室へと14/27が分散された。文学部は全講座の図書を研究室に独占せず、書庫に集めて公開し、書庫内の検索も文学部の人には自由にできるという研究しやすい伝統がある。この伝統が今、危機に瀕している。今回、書庫安全調査をしてもらったのは文学科だけだが、哲学科書庫の建築年はもっと古い。だからスペースが足りないのは明らかである。

増加する図書は厄介者のように見られがちだが、大学内での理工学系の建物施設の広がり様と比べれば、文学部などたった4つの建物に押し込まれ、書庫もままならぬとあわれなものだ。10-20年に1度は増築されている経過もある。デポジットライブラリーも考えねばならない時期にきている。理工学系の施設が全国的に広がっていくのをみれば、世界中から図書を集めている大学図書館は、もっと広い容積をもった施設を計画的に用意すべきである。

第16回全国研究集会に参加して

那須 たみこ

京都大学理学部地質学鉱物学教室

継続教育のテーマに惹かれて、群馬水上温泉で開かれた全国研究集会に参加してきました。「温泉」に行くことが決して目的ではないことを家族中に強調して早くからカレンダーの余白を確保しておきました。留守中の子供達の生活を、3人3様に振り分けし、長女に統率をとるよう、しっかりいいわたして「がんばるといでやー、おみやげわかっているなー」の聲に送られて出かけてきました。

遠路はるばる来ていただいた立教大学の河井先生の「継続教育の課題と方法」について

の講演は、図書館職員養成の諸外国の様子と日本の現状、図書館職員の地位の確立のための課題と運動のもっていき方、図書館職員自らの心得など、エピソードも交えて楽しく、示唆に富んだお話でした。しかし、現在の一人職場にひきよせてみると、たいへん恨めしいものでありました。(夜の懇親会では、各職場の苦しい実情に対し、イヤードウモ・・・と考えこんでおられた御様子) 専門的な資料を扱い、サービスの最前線である教室図書室で日々思うことは、「定員がほしい。」約600カ所の国内外の交換先などから毎日毎日送られてくる資料の山、山。研究者の手足となれる図書室であるために、まずは、資料を体系的によく整理したい、目録もとのえたい。しかし、図書にかかわる(イヤ、それ以外のことも) あらゆることをオールマイティにこなさなければならない教室図書室の現実。一つ仕事をしていれば、他の仕事はどんどんたまる。手がけた仕事は、「コピーがつかまりました。」「相互利用の借用書を発行して下さい。」「製本の仕方を教えて下さい。」et c.etc.こんな中で、どうすれば、継続的に自己を高め教育することができるだろうか。理工系の図書館職員として、語学に習熟したい、少しは、専門的な知識をもっていることが望ましいのではないか、せめて、理工系の主題に対する研修が行われたいだろうかと思いはつのはばかりです。一人一人が自己研修に励み、ベテランにならっていくことは勿論のことでしょう。それと同時に図書館職員集団としての力量を高めることも、非常に大切なことではないでしょうか。特に、昨今のように、専門性を無視した頻繁な異動が行われ、職場会議もバラバラになっていきがちな状況の中では、利用者に安定した質の高いサービスを継続していくことが非常に難しくなっています。こんな時期こそ、ますます職場集団としての力量を高める場を確保することが大切になってきているのではないのでしょうか。そのような観点から今回の研究集会では、東京大学農学部図書室で実践してこられた職場集団としての主題研修の歴史と、現在の到達点や問題点、他の大学での具体的な実践報告などを聞きたい思いが一杯で出かけました。しかし、その点では、少々期待はずれでした。というよりむしろ、そのような場を確保することがどの職場も非常に困難になってきていることをひしひしと感じた集会でした。

京都大学理学部では、各学科毎にかなりの図書室を持ちながら定員の一人職場や、時間雇用職員のみが職場が増え、必死の思いで運営されています。しかし、辛うじて、公的な理学部図書委員会が存在し(図書職員全員と学科代表の教官全員が対等に一票の投票権をもち参加) その下には、図書事務連絡会議が図書職員全員参加で月1回持たれています。私達はこの場を常に意識的に利用して、自主的な継続研修の場としていけるよう働きかけていきたいと考えています。(実際には一人職場が多くなってくると仕事がまわらなくなり、職場を空けることが困難になってきていますが...) このことと同時に、私たちが自主的に継続教育を続ける場として、大図研の役割は大きいものがあります。

京都支部では「大図研大学」の企画の一環として「科学史」のゼミがこの4月からスタートしました。これは、理工系の図書館職員として科学の歴史的な知識について学ぶことがぜひ必要だという議論の中で京都大学理学部の教官の援助を得ることができ実現したものです。今回の研究集会でも「科学史」ゼミの発足を竹村氏と二人で報告すると共感される方が多く、帰路の列車の中でいろいろな方からアドバイスをいただいたり、大いに励ましていただきました。もっとも、帰ってから、ゼミの講師として一肌ぬいいただいた某教官にそのことを少し話したら、「実践せん先から全国で吹聴してくるとは何事ぞー」と竹村氏ともども、どえらくお叱りを受けました。「ごもっとも」と反省しながらも、どうやら順調に走り出していくきざしに胸をなでおろしています。

理想と職場の現実のギャップはますますはてしないものがありますが、子供が5人いてもものともせず参加されたという大阪の某方や、地域や職場での様々な活動をこなしながら頑張る全国の仲間と交流できたことは大変大きな励ましになりました。

大学図書館問題研究会第21回全国大会の開催について

大学図書館問題研究会の第21回全国大会を下記により開催します。

1990年代幕開けの年の大会として、大図研創立以来の大学図書館20年の歩みを総括し、今後の展望を見出したいと思えます。

会場は瀬戸内海に面し、県下指折りの名園とプールも楽しんでいただけます。

多数のご参加をお待ちしています。

記

◇とき 1990年8月4日(土)～6日(月)

◇ところ 〒655 神戸市垂水区東舞子町18-11 「舞子ビラ」

TEL (078) 706-3711 (代表) FAX (078) 706-2212

(JR 舞子駅、山陽電車舞子公園または霞ヶ丘より徒歩10分)

◇日程

	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
8/4 土				受付	開提 会案		全体討議		記念講演	休憩		懇親会	
8/5 日		分科会		昼休 食憩			分科会			夕休 食憩		自主企画 ほか	
8/6 月		主題別交流会		昼食		全体会		閉 会					

注) 8/5 12:00 記念撮影

議案書は7月上旬に発送の予定です。各支部や大学で必ず議案書を討議し、大会にはそこで出された意見や職場の経験、各自の研究・実践の成果を持ち寄りましょう。